

宮本地車噺



第10回「明智光秀・織田信長 本能寺の変（2）」

先月は見送り虹梁に刻まれた本能寺の変にいたる過程をご紹介いたしました。

今回は小屋根枅合三方、本能寺の変のお話です。

「本能寺の変」はたくさんの地車彫刻の題材として採用されています。

この彫物に携わった河合申仁師（新調当時は木下彫刻工芸、現在賢申堂堂主）にお聞きしたところ、「本能寺の変」は皆が知っている歴史の場面と言うことだけではなく、織田信長自身が合戦に参加している題材がこの場面しかないことが人気となっているとのことでした。

なるほど言われてみれば確かに他の信長の彫物といえば馬上で指揮する姿ばかりです。

さて宮本町の「本能寺の変」ですが、三方全てが前板、芯板、中板が2枚、奥板と五層構造になっており、他に類を見ないほどの奥行きで二重見送りかと思えるほどの細工となっています。正面には馬上の明智光秀を鋭く睨む織田信長が刻まれており火矢により燃えさかる本能寺を背景にした迫力の場面が、左には薙刀を手に奮戦する信長の妻濃姫の姿が、そして右には小姓森蘭丸が安田作兵衛と槍にて対決している場面、と枅合三方を本能寺そのものに見立てた大パノラマとなっています。



正面枅合はこの5枚の板で形成され、かつてない奥行きを表現している。前板には馬上の明智光秀が刻まれ、芯板以降には本能寺の建物が分けて彫られている。

信長は羽柴秀吉の応援に自ら出陣する為、わずかな供回りの者を連れて京都の本能寺に入りました。早朝、小姓蘭丸の注進「水色桔梗の旗印、明智日向守殿謀反！」の声に起こされた信長は「是非に及ばず。」と寝着のまま弓矢を取って応戦しましたが、多勢に無勢。明智側の圧勝となってしまいました。信長は炎燃えさかる本能寺の中に自刃し、果てました。享年49歳であったそうです。天正十年（1582年）六月の出来事でありました。



織田信長



信長正室 濃姫



小姓 森蘭丸